

六
花

り
つ
か

月刊俳句雑誌

2006

rikka haikukai
designed by masami

6月号

山田文鳥二十五回麦秋忌

薔薇の花命日の湯を満たしけり
背に負へる子のおもらしや麦の秋
てのひらに鏝の匂へる走り梅雨
薪燃ゆる甘き匂ひや走り梅雨
種蒔くや日暮れの畝を折り返し
桜蘂踏んで仰がばまた降り来

一重薔薇流血覚悟で盗みけり
野茨や須磨は海光溢れしめ
野茨の散り敷く線路電車来る
棘削いで薔薇の花束湿り帯ぶ
仰ぎたる薔薇の天から蜜こぼる
葉を摘みに丘へ登りぬこどもの日
打たせ湯に頭叩かせ走り梅雨
走り茶の湯をさましゐる昼の坊

ことり 芝不器男奨励賞

桐咲いて高嶺の華となりにけり

ことり

元日のひとり遊びの輪投げかな
北風へ恋を冷ましに出でにけり
冬夕焼小さき影の飛び交ひぬ
背な越しに寒の雨音聴いてをり
寒菊の咲き誇るまま焼べらるる
身の内に探す温みや寒の星
オルゴールの冷たき蓋を閉ぢにけり
ストーヴの音を聴きつつ眠らぬ夜
枕辺の冷たき髪を拾ひをり
冬の水連山は藍深めたる

探梅や身の温もりの握り飯

松本文一郎

東京の初雪の味確かめし

寒鰯の白味噌仕立海女の宿

探梅や鳥類図鑑道連れに

梅一輪痛める膝で辿り着く

探梅とは早咲きの梅の花を探して主に野山を歩くことで冬の季語。気温はまだまだ寒く、出かける前には温かかった握り飯が懐の中で梅の花を探して歩くうちに冷えてきて体温と同じ位になったのか、もしくはコンビニで買い求めたおにぎりが体温によって温もったのかどちらかだろうが、探梅の頃の気温を、握り飯の温みを言うことによって微妙、絶妙に表現した。「鳥類図鑑」の句もよい。

春の潮

木内美保子

掌にのせて鶯餅鳴かず
 暖かや罫の球根根をのぼす
 啓蟄や兵糧部隊の蟻の列
 岩礁に藻の色深き春の潮
 尾鰭跳ね値札を飛ばす桜鯛

摩耶詣

笹村政子

摩耶詣牧より招く飾り馬
 菜の花や飾り馬待つ詣道
 法螺貝の音に春山を開くかな
 囀りや山伏問答間のありて
 大護摩の煙にむせる春シヨール

しやぼん玉

水谷ひさ江

しやぼん玉靴脱ぎ捨つる草の丘
 母の手を振り切つて追ふしやぼん玉
 名を呼べば逃げゆく笑みやしやぼん玉
 しやぼん玉中に歪める播磨富士
 しやぼん玉ぶつきらぼうにこはれけり

潔癖な

市川伊團次

潔癖な影を落として白牡丹
 無精髭撫でて新茶の碗をとる
 臃かな去る者ときに追ひかけて
 妻と居てほどよき臃月夜かな
 春風やコールタールを屋根に塗る

檀木集

春潮

池崎るり子

風光る白一色の千羽鶴
春光や水平線のくろぐろと
ワイシャツの白一色に新社員
ネクタイの玉虫色や春の風
春潮や明石岩屋のタコフェリー

雛

岩松 八重

吹き散らす金管楽器春隣
雪解けや会津大仏ここに在り
リュックにて戦火くぐりし雛飾る
この雛は九十一歳と笑ふ母
雪解けの畑の大根ひき抜きぬ

春いろいろ

いば 智也

ふくらみの大き小さき梅つぼみ
隣席は春の時雨に遭うたらし
耕しや鋤が止まれば手が動き
春昼の神戸ハイカラメロンパン
春の夜を語る青年泣く中年

六花集

山田六甲選

わかやぎすずめ

春の空草に寝転び眺めおり
咲きかけの菜の花を手で包みけり
パンジーを眺む私も咲きたしと
お帰りと走つてくる子と春の猫
春の朝希望の光昇りくる

五ヶ瀬川流一

傘さすや落ち残りたる姫椿
臘梅や声を掛ければ散りさうな
菜の花や水引き寄せる水車小屋
黄梅は平郡の里の色なりぬ
揚ひばり青磁ならべる自由市

田尻 勝子

平居 濡子

手術日を朱で印して春隣
オペ前の夫に眼力春一番
雛の夜や医療機器より電子音
下萌やてのひらに書くアリガトウ
春を待つロールケーキを切りながら

たんぽぽはたんぽぽのようにならびけり
それぞれに月も陽もあり春の空
春水をみつめておれば流れけり
人の持つ指幾億や春來たる
春光やまぶた閉じれば血潮見え

(前略)

下萌やてのひらに書くアリガトウ 平居 滯子

掌に文字を書くことが伝達的手段だとすると、「アリガトウ」と書いたのは、何らかの事情で声を出せないか言葉で言えない状況にある人物。忽ち連想できるのは、病人が感謝の気持ちを身内に指先で伝えたということが考えられる。礼を言われた(書かれた)主人公は言葉で聞くよりも数倍数十倍感激したことであろう。一文字ずつゆっくりとてのひらに書く様子が鮮明。下萌えには大地が眠りから覚めて生命力のわき出てくる力強さを示唆しているし、希望を感じさせる。

咲きかけの菜の花を手で包みけり わかやぎすずめ

咲きかけた「菜の花を手で包んだ」とだけ言った。これはただの報告かといえそうではなく、手で囲まれた「咲きかけの菜の花」は読者によって擬人化して観賞されたり、科学的物理的にも温度が加わって外気にさらさ

れているときよりも早く咲くのではないか、などと想像が広がるから、ただの報告句ではないのである。また、菜の花を両手で包む主人公の優しさなども伝わってくるのではないか。「咲きかけの」がこの場合有効であるのは言うまでもなし。

菜の花や水引き寄せる水車小屋 五ヶ瀬川流一

たんぼぼはたんぼぼのようにならびけり 田尻 勝子

「わーっ」と思わず声を上げてしまった。ここまで開き直られると馬鹿馬鹿しさを超越して「そうだよねーっ」と相づちを打ってしまう。かつての京極杞楊「都をどりはヨイヤサーほゝゑまし」や星野立子「近づけば大きな木瓜の花となる」のような句を作る作家になるのかも知れないと将来が楽しみ。「春水をみつめておれば流れけり」も同様に大きな発見がある。

満天に霜満ち聲の無き山河

菊谷 潔

口ごもり片手で渡す卒業証

三村 昭子

梅越しに彼方の海の光りけり

中瀬 定子

壺風呂の空を仰がば冬の月

永田 勇

壺風呂とは陶器で造った大きな壺の浴槽で、露天湯などにみかけるものではないかと思う。私の近くの温泉に

も設置してあって、鉄製の五右衛門風呂とは少し趣がちがう。大方は一人分の大きさだから、気分的にも結構ゆとりができる。ふと空を見上げたら冬月が中天にあつた。

壺風呂のゆとりが月を仰がせたのであろうし、温まった身体で見上げるには丁度良い。

武者人形重き鎧の剛さかな	延川	笙子
紙雛を友と一緒に折つてをり	金月	律子
一品の春の山菜映えにけり	霜寄	恵美子
野を焼ける煙の先は春霞	松本	千勢子
芽柳や水音細く群るる鯉	大上	保子
菜の花の棧敷なりけり河川敷	山本	ミツ子
雪洞に映える夜桜見物す	松本	蓉子
軒先に干す俎や啄木忌	河島	和子
浅蜷汁身の無き殻のありにけり	横山	迪子
網戸ごし友の娘の笑顔かな	出口	誠
仏壇の埃払ひて桃の花	赤松	按摩守
川土手を覆ひつくしぬ黄水仙	筒井	八重子
桃色に染まる山裾うらかけし	金月	洋子